２．三位一体の神について

父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、
わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。

マタイの福音書２８章１９～２０節

三位一体の神について学びましょう。

聖書の神は「父と子（イエス）と聖霊」の「三位一体」です。その要点は、①父と子と聖霊は神である、②父と子と聖霊は神として上下は無いが役割上の違いはあるという二点です。

まず、①「主は私たちの神、主は唯一」（申命記６章４節）とあるように、旧約聖書では神は一人と言われました。

でも、新約聖書を見ると、多くの箇所でイエスさまも神だと言われています。例えば、ヨハネは、天地を造った「神のことば」であるイエスは神だと言います（ヨハネの福音書１章１、

3。１４節）。「この方こそまことの神、永遠のいのちです。」（ヨハネの手紙第一５章２０節）イエスさまも、トマスの「私の主、私の神よ」との告白を受け入れます（ヨハネの福音書２１章２８～２９節）。そして、「アブラハムが生まれる前から『わたしはある』」と証言し（ヨハネの福音書８章５８節）、湖上を歩いて「わたしはある」と証言するなど（マタイの福音書１４章２７節）、イエスさまはご自身が「わたしはある」と名乗られた旧約の神であることを明かしました（出エジプト記３章１４節）。

同時に、聖書は、聖霊もまた神だと証言します。例えば、聖霊は「神の御霊」「主の御霊」と呼ばれます（コリント人への手紙第一３章１６節，コリント人への手紙第二　３章１７節）。「聖霊の宮」は「神の神殿」と呼ばれ（コリント人への手紙第一　６章１９節、３章１６節）、「聖霊を欺く」ことはそのまま「神を欺く」ことと言われます（使徒５章３～４節）。このように、聖書は、聖霊を神と同じ存在であると証言しています。

以上見てきたように、新約聖書を素直に読む限りに於いて、父なる神は神であり、子なるイエスさまも神であり、聖霊も神であると結論せざるを得ません。つまり、父も神、子も神、聖霊も神ということは、神が三人いることになります。よほど曲解して読まない限り、これが聖書の証言するところです。つまり、神は三人いるのです。

でも、そうなると、申命記で「主は唯一」と言われていたのはどうなるのでしょうか。聖書の神が「唯一」という聖書の証言は嘘だったのでしょうか。１人が正しいのでしょうか、それ

とも3人が正しいのでしょうか。

この答えは、聖書を誤りなき神のことばと信じる者にとっては、両方とも聖書の教えるところだということです。つまり、神は一人であると同時に三人いるということです。これが、聖書を文字通りに読んで理解できる、ただ一つの結論です。神は唯一です。それはその通りなのですが、でも同時に、父と子と聖霊は神であり神は三人です。「三にして一、一にして三」、これが聖書の神です。唯一神でもなく、多神教でもない、これを「三位一体」と言います。

人の理性では1＋1＋1＝3です。小学生でも分かります。でも、聖書の神は、敢えて数式で表すなら1＋1＋1＝1ということになります。あり得ないと思うのですが、それはあくまで私たちの理性で理解しようとする限りに於いてなのであり、その意味では聖書の神は人の理解を超えています。こうして、三位一体の神は、人のいかなる「理性の光」によっても「自然の光」によっても理解することはできず、ただ聖書によってのみ理解できます。聖書は、堕落した人間が、三位一体の神と世界を正しく理解することのできる唯一の道です。それは、神のことばをもって神のことを解き明かすことに他なりません。人の堕落した理性によってではなく、言わば神の理性をもって、神のことを解き明かし、理解します。そして、その聖書は、神が「父と子と聖霊」であると同時に「唯一」だと言います。三にして一、一にして三です。これが聖書の啓示する神です。その通り理解すると「三位一体」です。

神が一人であると同時に三人いると聞くと、ある人は「それはおかしい」と思います。「だ

からキリスト教は間違っている」と高慢に見下します。また、ある人は、これを自分の頭で矛盾なく理解しようと努めて、三か一のどちらかで理解しようとします。それで、古代教会では異端が出ました。異端の一つは、神があくまで唯一であって、キリストと聖霊は神ではないと理解しました。唯一神論です。その反対に、別の異端は、父と子と聖霊は神だが、父と子と聖霊は一つではないと理解します。三神論、あるいは多神教です。こうして、唯一神教でも多神教でもなく、キリスト教は「三位一体」という理解が定着するまでには、およそ３５０年という長い年月がかかったのでした。

三か一か、唯一神か多神教か、聖書を抜きにしては、愚かな人間はこの間を永久に行ったり来たりするしかありません。でも、さまよえる人間の理性をよそに、聖書は神が「三位一体」だと記します。神は「三にして一」です。三だけでもない、一だけでもない、「三にして一」という存在で完結しているのです。「三位一体」について、ある学者はこう解説します。「神が一のみでなく三のみでもなく『一と三』であるという真理は、神は自己以外の何ものをも必要としない自己完結者であり給うということである。かかる意味に於いて、神は永遠者であり給うのである。」

つまり、父と子と聖霊がそれぞれ神であるという事実は、それ自体で他には何も必要としない、「わたしはある」という永遠の存在者として、それ自体で完結し、完成しています。それで、人の理性は、永遠に変わることなく生きておられる「三位一体」の神を聖書から知ることによ

って、長かったさすらいの旅を終えることになるのでした。

②何にも依存せず、すべてを自ら決定し、変わることなく永遠に生きておられる三位一体の神は、同時に、生きて働いて、世界を創造し、人を罪から救って万物を再創造なさいます。その際、父と子と聖霊は自分の役割を果たします。つまり、父と子と聖霊は神としては本質的に同じなのですが、同時に各自が独自に役割を担当します。具体的にはこうです。「御父にはみわざの初めと、一切の事柄との起源と源泉とが帰せられ、御子には知恵と、計画と、諸々の事柄の配列が帰せられ、御霊にはすべての活動の力と、効力とが帰せられる。」（カルヴァン）つまり、父が計画したことを、御子が世に啓示し、聖霊が実行するという関係です。イエスさまが父のみこころを行い、聖霊がイエスの栄光をあらわすとも言えます。これらは上下関係のように見えますが、単に役割上の区別です。

以上見てきたように、「三位一体」についての理解は、聖書の解釈に決定的に重要となります。同時に、世界を理解する上でも根本的に重要です。世界は三位一体の神が造ったからです。例えば、神として本質的には対等でも役割上の違いがあるとの真理は、家族や職場などあらゆる関係を理解する鍵となります。また、三と一が矛盾なく両立するという聖書理解は、愛と正義、自由と秩序、権利と責任、人間の善悪、肉体と精神など、私たちの理性を永久にさまよわせるこの世に潜在する様々な問題を考える上で、大きな解決の光をもたらしてくれることでしょう。